●総 説●

血管内膜肥厚とミッドカインの関連について

坂野上	七呂志	森崎	浩一	宮地	紘樹	前川	卓史	玉井	宏明
高橋	範子	渡辺	芳雄	森前	博文	井原	努	堀	昭彦
		小林	昌義	山本	清人	古森	公浩		

要 旨: ミッドカイン(MK)は細胞の生存や移動を促進し,癌の進行,炎症性疾患の発症,そして傷害を受けた組織の保存,修復に深く関与している。血管狭窄モデル,静脈グラフトモデル,ステント内膜肥厚モデルいずれにおいてもその内膜肥厚に関与していることが示され,とくに前2者ではMKの抑制により内膜肥厚も抑制された。今後MKを標的とした分子標的薬の術中局所投与や薬剤溶出型ステントの開発による血管内膜肥厚の予防が期待される。 (J Jpn Coll Angiol, 2011, 51: 415–422)

Key words: intimal hyperplasia, vein graft, midkine, restenosis, graft failure

序 言

動脈硬化や血管形成術後ならびにバイパス術後の血 管(再)狭窄のメカニズムは複雑で多岐にわたる¹⁾。病理 学的には血管内膜の肥厚が大きな一面を占める。傷害を 受けた内皮細胞から放出される反応性シグナルや集まっ てくる炎症性細胞,中膜から内膜へ移動してくる平滑筋 細胞などによって,新生内膜の増殖が起こる。そのため 血管形成術後やバイパス術後再狭窄の予防には血管内 膜肥厚を抑制することが重要となる。これまで血管狭窄 のメカニズムにおける種々のステップに着目し,数多く の分子を標的として,その予防が試みられた。MCP-1や E2F, AP-1, c-myc, MMPなど実験レベルでは結果を残 しているものも多いが,現段階で臨床使用に耐えうるも のは開発されていない²⁻⁴)。

ミッドカイン(MK)は 1988 年に発見された成長因子お よびサイトカインである。MK はもともとレチノイン酸に より分化誘導された胚性癌細胞の初期の段階で発現する ことで発見された。プレイオトロフィンとわずか2つで 成長因子ファミリーを形成し,遺伝子配列はおよそ半分 を共有している。

その生物学的機能は、とくに癌、神経・心臓、炎症な

名古屋大学大学院血管外科

らびに血圧の4分野で重要である。それを支える生物 学的活性として、抗アポトーシス・細胞遊走能・炎症性 サイトカイン誘導・血管新生などが挙げられ多岐にわた る⁵⁾。血管内膜肥厚に関して最近報告されているメカニ ズムを考慮し、われわれはとくにMKの細胞遊走能、炎 症性サイトカイン誘導という働きに着目した。MKの抑 制により炎症性細胞の遊走が抑えられれば、新生内膜形 成も軽減できる可能性があると考えた。

対象と方法

1. 血管狭窄モデル⁶⁾

ラットを用いて頸動脈のバルーン傷害モデルを作成し た。術後3日目,7日目,14日目に血管を採取し,組織 学的解析,RT-PCR,Western blottingを行った。MK欠 損マウスを用いて頸動脈結紮モデルを作成した。このモ デルにポンプを用いて,生理食塩水,人アルブミン, MK蛋白を7日間投与し,内膜肥厚の程度を比較した。 ウサギ MKの遺伝子配列を解析し,アンチセンス ODN を作成した。In vitroで効果の高いものを選択し,ウサギ 頸動脈のバルーン拡張後 LipofectoAmine と混合したア ンチセンス ODN を血管壁に導入した。後日血管を採取 し,Western blotting や組織学的解析を行った。

2010年12月6日受理



Figure 1 Increased MK expression in the carotid artery after balloon injury. (a) RT-PCR products for MK and GAPDH were separated on 1% agarose gels. (b) Competitive RT-PCR for MK and GAPDH. (c) Proteins extracted from the carotid arteries that corresponded to an original weight of 10 mg were separated by 15% SDS-PAGE. MK protein was detected with anti-mouse MK antibody on Western blotting.

ステント留置モデル⁷⁾

高コレステロール食を投与したウサギの頸動脈から 5Fr. シースを挿入し、外腸骨動脈にステントを留置する モデルを作成した。後日血管を採取し、RT-PCR、Western blotting,組織学的解析を行った。マウス腹腔内から 採取したマクロファージを LDL および酸化 LDL を加え た培養液で培養し、Western blotting および Oil red O 染 色を行った。

3. 静脈グラフトモデル^{8,9)}

ウサギ MK に対する siRNA を作成した。In vitro で効 果の高いものを選択し、さらに生体内での安定化を図る ため、安定化修飾をしたものを使用した。ウサギの頸動 脈を離断後、頸静脈を間置した静脈グラフトモデルを用 いた。導入にはアテロコラーゲンを用いた。アテロコ ラーゲンは牛真皮から得られるタイプ1コラーゲンでペ プシン処理により抗原性が排除されているものである。 これまでに遺伝子やオリゴヌクレオチドの細胞内取り込 みや分解酵素に対する抵抗性を増加させ、さらにその徐 放を可能にするという報告がある。そのため siRNA の担 体として有用であることが期待される。後日グラフトを 採取し, Western blotting や組織学的解析を行った。

また静脈グラフトモデルで通常食と通常食に pitavastatin (1 mg/kg/d)を混合した食事を投与した群とで内膜肥厚の 程度を比較, さらに MK 発現の差についても比較した。

結 果

1. 血管狭窄モデル

正常動脈では MK RNA はわずかに発現しているのみ であったが,バルーン傷害後3時間ではやや減少し,3 日目には増加し始め,7日目にピークに達した。このとき には正常血管の約10倍となり,新生内膜が完成する14 日目にはやや減少に転じた。MK 蛋白の発現は RNA と 同様の経過をたどった(Fig.1)。免疫染色を行うと,正常 血管では MK は内皮細胞にのみ発現していたが,7日目 と14日目には新生内膜に強く発現していた。すなわち, MK が新生内膜形成に強く関与していることが示唆され た。

MK 欠損マウスでは出生後海馬の発達が遅れる以外



Figure 2 Left: Intimal lesion formation was suppressed in MK-deficient mice, and exogenous MK caused its resumption. The results of hematoxylin and eosin staining of samples 14 days after ligation (b–e) and a control (a) are shown. (a) Control (without ligation); (b) wild-type mice ($Mdk^{+/+}$); (c) MK-deficient mice ($Mdk^{+/-}$); (d) $Mdk^{-/-}$ mice treated with saline; (e) $Mdk^{+/-}$ mice treated with MK protein. Arrowheads indicate the internal elastic lamina. Asterisks indicate intimal lesions. Bar, 100 µm.

Right: Morphometric analysis of neointima formation. (a and b) Comparison between $Mdk^{+/+}$ and $Mdk^{-/-}$ mice; (c) comparison between $Mdk^{+/+}$ and $Mdk^{-/-}$ mice treated with either saline, albumin, or MK protein. (a) The mean ratios between the areas of the intimal lesion and the media (IL/M) and standard deviations for $Mdk^{+/+}$ and $Mdk^{-/-}$. The difference between $Mdk^{+/+}$ and $Mdk^{-/-}$ mice was statistically significant (P < 0.001; Mann-Whitney test). (b) Circumferences of the external elastic lamina (EEL) and lumen (Lumen). The circumference of the lumen was significantly different between $Mdk^{+/+}$ and $Mdk^{-/-}$ mice (P < 0.001; Mann-Whitney test). In all plots, the open columns indicate $Mdk^{+/+}$ mice, and the filled columns indicate $Mdk^{-/-}$. NS, not significant. (c) The mean ratios (IL/M) and standard deviations for $Mdk^{-/-}$ mice treated with saline, human albumin, or MK. The open column indicates mice treated with MK; the gray column indicates mice treated with human albumin; and the filled column indicates mice treated with saline. The difference between the MK-treated group and those treated with human albumin or saline was statistically significant (P < 0.001; Mann-Whitney test).

大きな異常は認めない。新生内膜形成は MK 欠損マウ スでほぼ完全に抑制されていた。新生内膜 / 中膜比も有 意に減少していることが判明した。一方, 中膜の肥厚の 程度はほぼ同様であった(Fig. 2 左)。

さらに新生内膜形成における MK の直接的な関与をみ るために,浸透圧ポンプから MK 蛋白を投与した。する と MK 投与群では新生内膜は通常通り形成され,生理 食塩水やアルブミンの投与群では新生内膜の形成は抑制 されたままであった(Fig.2 右)。

炎症性白血球、とくにマクロファージは新生内膜形成 に重要な役割を果たしていることが報告されている。 CD-45(炎症性白血球抗原)陽性細胞は正常マウスでは新 生内膜内に認めたが、MK 欠損マウスではほとんど認め なかった。さらに正常マウスの新生内膜内には MOMA-2(単球 - マクロファージマーカー)陽性細胞は 7/4(好中球マーカー)より有意に多く認めたが, MK 欠損 マウスではどちらもほとんど認めなかった。

ウサギ MK に対するアンチセンスを LipofetoAmine を 用いて導入すると、4 時間後に細胞内に取り込まれている ことが確認された。24 時間後にはすでに wash out されて いたが、MK 発現の抑制効果は7日目にも継続してい た。その結果、内膜肥厚も有意に抑制されていた(**Fig.3**)。

2. ステント留置モデル

高コレステロール食投与ウサギは血清コレステロール 値が有意に上昇した。さらにステント内の新生内膜形成 も有意に増悪した。MKの発現は蛋白でもRNAでも3 日以内に認め始め、7日目にピークに達した(Fig. 4)。

術後7日目,14日目,28日目の血管を採取し,CD31 (血管内皮細胞),α-SMA(平滑筋細胞),RAM11(マクロ ファージ),MK,それぞれの発現の局在を確認した。平



Figure 3 Left: In vivo transfection of a rabbit MK antisense ODN. FITC-conjugated AS3 was transfected into the common carotid artery. *A*, *top*: localization of the ODN at 6 h after transfection (*left*). The nuclei were stained with propidium iodide (*middle*). A merge view of the ODN and nuclei stain is also presented (*right*). The elastic lamina of the vascular wall is well known to be autofluorescent. However, by merging the green signals with those of propidium iodide, we were able to detect that the transfected FITC-conjugated AS3 persisted in the wall at least 6 h after transfection. *A*, *top middle* and *bottom middle*: negative controls of no transfection and lipofection alone, respectively. *A*, *bottom*: localization of ODN 24 h after transfection. Bar = 50 µm. In *B* and *C*, the artery was transfected with AS3 (AS) or sense control (S), removed 4 days after transfection, and then subjected to Western blot analysis for MK expression. Experiments were performed independently 3 times and gave the similar results, with a representative result shown here. The relative densitometric densities of MK bands in *B* standardized as to β -actin bands are also shown (*C*). In *D*, MK expression was monitored 4, 7, and 14 days after transfection of ODN into the balloon-injured artery. Scramble (Scr), lipofection alone (Lip), and no transfection (NT) controls were included.

Right: Effects of a rabbit MK antisense ODN on intimal thickening induced by balloon injury. Arteries were removed 14 days after balloon angioplasty with MK antisense or sense ODN. They were then stained with hematoxylin and eosin (*A*). The ratio of intima and media (*B*) was calculated by means of an image analyzer. The number of animals used for the experiment was 6; in 3 animals, the antisense ODN (AS3) was administered to the left carotid artery and the corresponding sense ODN to the right carotid artery, whereas in the other 3 animals the sense ODN was administered to the left and antisense one to the right. **P* < 0.05 (by Mann-Whitney *U*-test). Bar = 50 μ m.

滑筋細胞は新生内膜内の比較的内皮よりに発現し、一 方、マクロファージはより深いところに発現していた。 MKの発現はマクロファージのそれと同様の分布をみせ た。二重蛍光染色でもマクロファージが MK を発現して いることが確認された。

酸化 LDL は LDL 受容体ではなく、スカベンジャー受 容体を通してマクロファージに取り込まれるようにな

る。LDLを多量に取り込んだマクロファージは泡沫化 し、血管内皮細胞障害,アテローム性動脈硬化病変を引 き起こすと考えられている。マクロファージを酸化LDL にさらすと,有意にMK発現の増加を認めた。

3. 静脈グラフトモデル

正常静脈では MK の発現はほとんど認めなかったが, 動脈環境にさらされると有意に増加し、7日目でピークを



Figure 4 Midkine expression during neointima formation. Right iliac arteries of hypercholesterolemic rabbits were obtained at the indicated number of days after stenting. The graphs show relative densitometric density ratios presented as the average \pm SE (n = 4). **P* < 0.01; ***P* < 0.0001 (Student *t* test). Western blot and reverse transcription-polymerase chain reaction (RT-PCR) data were obtained from two individual animals, respectively, at each time point (except for control and day 7: n = 4). Because the results of each set of experiments were similar, representative data are shown. A: Midkine protein expression revealed by Western blot analysis. B: Midkine messenger RNA expression estimated by RT-PCR. *GAPDH*, Glyceraldehyde-3-phosphate dehydrogenase.

迎えた。7日目の秒本では MK は内皮に強く,中膜に中 等度発現していた(Fig. 5)。

ウサギ MK の遺伝子配列は解析されていたので,そ れをもとに siRNA を 5 種類作成した。In vitro の実験で 抑制効果の最も高いものを選択し,さらに生体内での安 定化を図る目的で,安定化修飾を施した siRNA を作成 した。導入に用いるアテロコラーゲンも種々の濃度およ びシート状のものも用いて比較した。結果,1.75%のア テロコラーゲンに siRNA を混合したものを用いると,ア テロコラーゲン自体がグラフト周囲でゲル化して,7日以 上留まっており,それが吸収されていく過程で siRNA が 血管壁内に効果的に導入されることが証明された。実際 に静脈グラフトモデル作成後7日目において MK の発現 が有意に抑制されることが確認された。

その効果により,手術4週後の新生内膜形成は siRNA 投与群で有意に抑制されていた(**Fig.6**)。

その機序として細胞増殖の抑制と炎症性白血球の遊 走が抑制されていることが示唆された。アポトーシスに 関しては変化を認めなかった。

さらに pitavastatin 投与を行うと, MK の発現は約半分 に抑制され, その結果静脈グラフト内膜肥厚も有意に抑



Figure 5 Increased midkine (MK) expression in a rabbit vein graft. A: The time course of MK expression in the rabbit vein graft is shown. Protein extracts of grafted veins at the indicated times after operation were subjected to Western blot analysis for MK and β -actin. B: Immunostaining for MK 7 days after the operation is shown (upper left and right). A magnified photo of the upper left panel is shown at upper right. The bottom panel shows a controlled staining without the first antibody of an adjacent section. Bars, 100 µm.



Figure 6 Quantification of intimal hyperplasia. A: Representative elastic Van Gieson-stained sections from animals at 4 weeks after operation. Representative photos at low (above) and high (below) magnifications are presented. *Arrowheads* indicate the internal elastic lamina. Bars, 1 mm. B: The graph shows the intima-media ratio (*left*) and intimal thickness (*right*) (n = 5 in each group, **P* < 0.05 by analysis of variance with the Bonferroni post hoc analysis). SCR siRNA, scrambled small interfering RNA; MK, midkine.

制されていた(Fig. 7)。

考 察

最近の研究では動脈硬化病変や血管病変治療後の再 狭窄の原因として炎症や血管平滑筋細胞の増殖が言わ れている。これまでとくに血管形成術後の再狭窄や静脈 グラフト晩期閉塞に対する予防的治療が数多く研究され てきた。これらの病変はいずれも局所に起こってくるた め、全身性の動脈硬化病変とは異なり、バルーン形成術 時に同時に導入したり、ステントから溶出するようにした り、静脈グラフトそのものに体外で導入、あるいはバイ パス後に担体とともにおいてきたりするような方法が考 えられている²⁻⁴⁾。唯一臨床的に実用化されているのは冠 動脈における薬剤溶出性ステントである¹⁰⁾。薬剤として は細胞増殖抑制作用のある抗がん剤や免疫抑制剤が用 いられている。これにより血管平滑筋細胞の増殖が抑制 され,再狭窄は劇的に減少した。しかし,それとともに 血管内皮の増殖も抑制されるため,遅発性のステント血 栓症の増加が報告されるようになり,抗血小板剤を長期 に内服しなければならないという欠点がある。種々の薬 剤溶出性ステントが開発されているが,この問題点は解 決されていない。

MK 欠損マウスを用いることで,新生内膜形成に MK が重要な役割を果たしていることが証明された。これは MK 欠損マウスに MK を投与することで通常マウスのよ うな新生内膜形成が惹起されたことによって,さらに はっきりしたものとなった。炎症性細胞は平滑筋細胞の 遊走,増殖に強く関与しているが,これが MK を介して



Figure 7 Left: Effect of pitavastatin on the development of neointima formation of the vein graft 4 wk after operation. (A) Microscopic findings of the middle portion of an autologous vein graft from the control group and the pitavastatin group. Arrowheads indicate the internal elastic lamina (elastica van Gieson staining; original magnification ×400). (B) Quantitative analysis of neointima formation of vein grafts. The intima/media index was significantly suppressed in the pitavastatin group (n = 6) compared with the control group (n = 6). Results are expressed as the mean ± SEM. *P < 0.05.

Right: Western blotting of whole vein grafts (2 wk after implantation). Quantitative analysis of MK expression of vein grafts showed significant suppression in the pitavastatin group (n = 6) compared with the control group (n = 6). Results are expressed as the mean ± SEM. *P < 0.05.

起こっていることが示唆された。いくつかの実験を通し て、MK は新生内膜に強く発現していたが、これが血管 平滑筋細胞そのもではなく、中膜から内膜へ遊走してき たマクロファージから産生されていることが判明した。 そして血管平滑筋細胞の増殖そのものを増加させるので はなく、マクロファージや平滑筋細胞の遊走を惹起する 作用をもつ。細胞増殖そのものではなく、血管壁の炎症 に関与しているという点は、前述の内皮細胞の増殖まで 抑制してしまう既存の薬剤と異なる点で、MK を抑制す る薬剤あるいは分子標的薬の開発ができれば、この点が 克服できる可能性も秘めていると考えられる。さらに MK はひと成人の臓器にはいずれにも発現がほとんどな いことからも、その抑制によって重篤な副作用が起こる 可能性はきわめて少ないと思われる。

MK を抑制する薬剤の開発とともにもう一つの大きな 問題は、その投与方法である。たとえば siRNA を溶出 するステントは未だ開発されていない。静脈グラフトで われわれが使用した投与方法はきわめて優れた利点をも つ。まず手技が簡便であるという点が挙げられる。さら に、これまでに報告のある投与方法やバルーン傷害モデ ルでわれわれが用いた方法は,投与したその時だけに導入されるというものであるが,この方法では局所に長時間とどまり,siRNAが徐放される。加えて,アテロコラーゲン自体にオリゴヌクレオチドなどの細胞内取り込みや分解酵素への抵抗性を増加させる作用がある。実際にその内膜肥厚抑制作用は著明な効果を認めた。

結 論

MK は血管内膜肥厚に深く関与しており、その抑制に より内膜肥厚が抑制された。今後 MK を標的とした分子 標的薬の術中局所投与や薬剤溶出型ステントの開発によ る血管内膜肥厚の予防が期待される。

文 献

- Dzau VJ, Braun-Dullaeus RC, Sedding DG: Vascular proliferation and atherosclerosis: new perspectives and therapeutic strategies. Nat Med 2002; 8: 1249–1256
- 2) Mori E, Komori K, Yamaoka T, et al: Essential role of monocyte chemoattractant protein-1 in development of restenotic changes (neointimal hyperplasia and constrictive

remodeling) after balloon angioplasty in hypercholesterolemic rabbits. Circulation 2002; **105**: 2905–2910

- 3) Conte MS, Bandyk DF, Clowes AW, et al: Results of PRE-VENT III: a multicenter, randomized trial of edifoligide for the prevention of vein graft failure in lower extremity bypass surgery. J Vasc Surg 2006; 43: 742–751
- 4) Kume M, Komori K, Matsumoto T, et al: Administration of a decoy against the activator protein-1 binding site suppresses neointimal thickening in rabbit balloon-injured arteries. Circulation 2002; 105: 1226–1232
- 5) Muramatsu T: Midkine, a heparin-binding cytokine with multiple roles in development, repair and diseases. Proc Jpn Acad Ser B Phys Biol Sci 2010; 86: 410–425
- 6) Horiba M, Kadomatsu K, Nakamura E, et al: Neointima for-

mation in a restenosis model is suppressed in midkine-deficient mice. J Clin Invest 2000; **105**: 489–495

- 7) Narita H, Chen S, Komori K, et al: Midkine is expressed by infiltrating macrophages in in-stent restenosis in hypercholesterolemic rabbits. J Vasc Surg 2008; 47: 1322–1329
- 8) Banno H, Takei Y, Muramatsu T, et al: Controlled release of small interfering RNA targeting midkine attenuates intimal hyperplasia in vein grafts. J Vasc Surg 2006; 44: 633–641
- 9) Fujita H, Banno H, Yamanouchi D, et al: Pitavastatin inhibits intimal hyperplasia in rabbit vein graft. J Surg Res 2008; 148: 238–243
- Garg S, Serruys PW: Coronary stents: current status. J Am Coll Cardiol 2010; 56 (10 Suppl): S1–S42

Relationship between Midkine and Intimal Hyperplasia in Vascular Disease

Hiroshi Banno, Kohichi Morisaki, Hiroki Miyachi, Takashi Maekawa, Hiroaki Tamai, Noriko Takahashi, Yoshio Watanabe, Hirofumi Morimae, Tsutomu Ihara, Akihiko Hori, Masayoshi Kobayashi, Kiyohito Yamamoto, and Kimihiro Komori

Division of Vascular Surgery, Department of Surgery, Nagoya University Graduate School of Medicine, Nagoya, Japan

Key words: intimal hyperplasia, vein graft, midkine, restenosis, graft failure

Intimal hyperplasia is a major obstacle to patency after angioplasty or vein grafting. Despite the diverse array of trials to prevent it, a satisfactory therapeutic strategy for clinical use has not been established. However, sufficient inhibition of early stages of intimal hyperplasia may prevent this long-term progressive disease. Midkine promotes migration, survival and other activities of target cells. It plays a role in tumor growth, inflammatory response and repair of injured tissue. In this review, we show that midkine plays a key role for intimal hyperplasia in the experimental resteonosis model after balloon injury, vein graft and stent implanting models. In the two former models, suppression of midkine attenuated neointimal formation. Increased clinical application of midkine inhibitors is needed and the improvement in delivery methods are among the subjects on which further basic research is required. Molecular drugs targeting midkine are expected to prevent intimal hyperplasia. (J Jpn Coll Angiol, 2011, **51**: 415–422)